

令和四年度  
高等学校入学選抜学力検査問題

第一部

国語

注意

- 1 問題は、**一**から**四**まであり、10ページまで印刷してあります。
- 2 答えは、すべて別紙の解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。
- 3 問いのうち、「……選びなさい。」と示されているものについては、問いで指示されている記号で答えなさい。
- 4 問いのうち、字数が指示されているものについては、句読点や符号も字数に含めて答えなさい。

問一 (1)と(3)の——線部の読みを書きなさい。

- (1) 実験に失敗した原因を探す。
- (2) 柔道の稽古に励む。
- (3) 苦手教科の学習に時間を割いた。

問二 (1)と(3)の——線部を漢字で書きなさい。

- (1) 頼んでいた本が宅配便でとどいた。
- (2) トレーニングではいきんを鍛える。
- (3) 台所をせいけつに保つ。

問三 次のAの文を、——線部を強調する文に書きかえるとどのようなになりますか。Bの文の[ ]に当てはまるように——線部の語を適切な形に書き直しなさい。

- A この料理には、みずみずしい大きなトマトが重要だ。
- B この料理には、大きなトマトの[ ]が重要だ。

問四 次は、中学三年生の武田さんが、生徒会だよりの部活動紹介に「部長としての決意」という題名で書いた文章です。武田さんはその文章を分かりやすく書き直すことにしました。③の文を、事実を表す文と考えを表す文の二つに分けると、考えを表す文はどこから始まりますか、最初の五字を書きなさい。

①サッカー部、新キャプテンの武田です。②今年、サッカー部には、一年生が十人入部しました。③その中には、小学生の時に違うスポーツをやっていて、体育の授業でしかサッカーボールを蹴ったことのない初心者が三人いて、私はこれまでの経験を生かしてサッカーの楽しさを伝えていきたいと思っています。

【作り方をまとめたメモ】

- 1 材料  
ピーマン、タマネギ、ニンジン、ひき肉、カレールー、ご飯、塩こしょう、ウスターソース
- 2 作り方
- (1)下ごしらえ(野菜は均等に)
- ・野菜をみじん切りにする。
  - ・カレールーをひとかけら細かくする。
- (2)いため方(順番に注意)
- ・  ①
  - ・ひき肉を入れ、全体に火が通るまでいためる。
  - ・野菜を加えてしんなりするまでいためる。
- (3)味付け(量に注意)
- ・塩こしょうを少々振る。
  - ・ひとかけらのカレールーを細かくしたものを加えて混ぜる。
  - ・  ②
- (4)仕上げ(火加減に注意)
- ・ご飯を入れ、強火で一気に入ためて完成。



【祖母との会話】

お父さんの誕生日に、カレーチャーハンを作りたいの。作り方を教えて!

あら、それは喜ぶと思うわ。それじゃあ教えるわね。最初に、ピーマン、タマネギ、ニンジンをみじん切りにするの。カレールーもひとかけら細かく切っておいてね。手を切らないようにね。次にフライパンに油をひいて熱くなったら、ひき肉を入れ、全体的に火が通るまでいためるのよ。

しっかりいためるのが大切なのね。

そうよ。ひき肉に火が通ったら、切っておいた野菜を加えて、しんなりするまでいためるのよ。そのとき塩こしょうを軽くふるのを忘れないでね。次にカレールーを加えて混ぜ合わせるの。その後小さじ一杯のウスターソースを入れるのが大切だからね。少なくとも多くてもだめよ。最後にご飯を入れて、強火で一気に入ためたら完成よ。頑張って作ってみてね。

ありがとう!頑張って作るね。



問六 次の、中学生の北沢さんが、父が小さい頃から好きな「カレーチャーハン」を作るために、祖母に作り方を聞いたときの【祖母との会話】と、【作り方をまとめたメモ】をそれぞれ書きなさい。

- |   |           |   |       |   |           |   |       |
|---|-----------|---|-------|---|-----------|---|-------|
| ア | 〔1〕 頭語    | 2 | 時候の挨拶 | イ | 〔1〕 時候の挨拶 | 2 | 頭語    |
| ウ | 〔1〕 頭語    | 2 | 安否の挨拶 | エ | 〔1〕 時候の挨拶 | 2 | 安否の挨拶 |
| オ | 〔1〕 安否の挨拶 | 2 | 頭語    | カ | 〔1〕 安否の挨拶 | 2 | 時候の挨拶 |

1 2 挨拶  
の頃と同じで、分かりやすく楽しい授業をされていると思います。

問五 次の、高校生の三浦さんが、中学三年生の時の担任の先生にあてた手紙の一部です。  
——線1「挨拶」、——線2「ようやく春めいてまいりました」のような言葉をそれぞれ何と言いますか。組み合わせとして正しいものを、ア〜カから選びなさい。

「これは、中学三年生の千穂が塾に向かう途中、同級生の山野真奈と昼休みに話した内容を思い出しているところから始まる話です。」

「この前、お父さんと一緒にパン、作ってみたの」

「へえ、真奈が？」

「うん。もちろん、売り物じゃなくて自分のおやつ用なんだけど、すごく楽しくて……あたし、パン作るの好きなんだって、本気で思った。だからね、高校卒業したらパンの専門学校に行きたいなって……思ってたんだ」

少し照れているのか、頬を赤くして真奈がしゃべる。そこには確かな自分の意志があった。真奈って、すごい。

心底から感心してしまう。すごいよ、真奈。

真奈が顔を覗き込んでくる。

「千穂は画家志望だよ。だったら、やっぱり芸術系の高校に行くの？」

「え……あ、それはわかんない」

「だって、千穂、昔から言ってたじゃない。絵描きさんになりたいって。あれ、本気だったでしょ？」

「……まあ。でも、それは……」

夢だから。口の中で呟き、目を伏せる。うつむいて、そっと唇を噛んだ。

山野のおばさんに頭を下げて、また、歩きだす。さつきより少し足早になっていた。

花屋、喫茶店、スーパーマーケット、ファストフードの店、写真館……見慣れた街の風景が千穂の傍らを過ぎていく。

足が止まった。

香りがした。とてもいい香りだ。焼きたてのパンとはまた違った芳しい匂い。

立ち止まったまま視線を辺りに巡らせた。写真館と小さなレストランの間に細い道がのびている。アスファルトで固められていない土の道は緩やかな傾斜の上り坂になっていた。この坂の上には小さな公園がある。そして、そこには……。

大きな樹。

枝を四方に伸ばし、緑の葉を茂らせた大きな樹がある。小学校の三、四年生まで真奈たちとよく公園に遊びに行った。みんな、大樹がお気に入り、競って登ったものだ。

あれは、今と同じ夏の初めだった。幹のまん中あたりまで登っていた千穂は足を踏み外し、枝から落ちたことがある。かなりの高さだったけれど奇跡的に無傷ですんだ。しかし、その後、大樹の周りには高い柵が作られ簡単に近づくことができなくなった。木登りができなくなると、公園はにわかには退屈なつまらない場所となり、しだいに足が遠のいてしまった。中学生になつてからは公園のことも、大樹のことも思い出すことなどほとんどなかった。

それなのに、今、よみがえる。

大きな樹。卵形の葉は、風が吹くとサワサワと優しい音を奏でる。息を吸い込むと、緑の香りが胸いっぱい満ちてくる。

千穂は足の向きを変え、細い道を上る。どうしても、あの樹が見たくなかったのだ。塾の時間が迫っていたけれど、我慢できなかった。ふいに鼻腔をくすぐった緑の香りが自分を誘っているように感じる。大樹が呼んでいるような気がする。

だけど、まだ、あるだろうか。とつくに切られちゃったかもしれない。切られてしまつて、何もないかもしれない。

心が揺れる。ドキドキする。

「あっ！」

叫んでいた。大樹はあった。四方に枝を伸ばし、緑の葉を茂らせて立っていた。昔と同じだ

った。何も変わっていない。周りに設けられた囲いはぼろぼろになって、地面に倒れている。けれど、大樹はそのままだ。

千穂はカバンを放り出し、スニーカーを脱ぐと、太い幹に手をかけた。あちこちに小さな洞やコブがある。登るのは簡単だった。

まん中あたり、千穂の腕ぐらいの太さの枝がにゅつと伸びている。足を滑らせた枝だろうか。よくわからない。枝に腰かけると、眼下に街が見渡せた。金色の風景だ。光で織った薄い布を街全部にふわりとかぶせたような金色の風景。そして、緑の香り。

そうだ、そうだ、こんな風景を眺めるたびに、胸がドキドキした。この香りを嗅ぐたびに幸せな気持ちになった。そして思ったのだ。

あたし、絵を描く人になりたい。

理屈じゃなかった。描きたいという気持ちが突き上げてきて、千穂の胸を強く叩いたのだ。そして今も思った。描きたいという気持ち。

描きたいなあ。

今、見ている美しい風景をキャンバスに写し取りたい。

画家なんて大仰なものでなくていい。絵を描くことに関わる仕事があった。芸術科のある高校に行きたい。けれど母の美千恵には言い出せなかった。母からは、開業医の父の跡を継ぐために、医系コースのある進学校を受験するように言われていた。祖父も曾祖父も医者だったから、一人娘の千穂が医者を目ざすのは当然だと考えているのだ。芸術科なんてとんでもない話だろう。

絵描きになりたい？ 千穂、あなた、何を考えてるの。絵を描くのなら趣味程度にしときなさい。夢みたいなこと言わないの。

そう、一笑に付されるにちがいない。大きく、深く、ため息をつく。

お母さんはあたしの気持ちなんかわからない。わかるうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。

ざわざわと葉が揺れた。

そうかな。

かすかな声が聞こえた。聞こえたような気がした。耳を澄ます。

そうかな、そうかな、本当にそうかな。

そうよ。お母さんは、あたしのことなんかこれっぽっちも考えてくれなくて、命令ばかりするの。

そうかな、そうかな、よく思い出してごらん。

<sup>5</sup> 緑の香りが強くなる。頭の中に記憶がきらめく。

千穂が枝から落ちたと聞いて美千恵は、血相をかえてとんできた。そして、泣きながら千穂を抱きしめたのだ。

「千穂、千穂、無事だったのね。よかった、よかった。生きていてよかった」

美千恵はぼろぼろと涙をこぼし、「よかったよかった」と何度も繰り返した。

「だいじな、だいじな私の千穂」そうも言った。母の胸に抱かれ、その温かさを感じながら、千穂も「ごめんなさい」を繰り返した。ごめんなさい、お母さん。ありがとう、お母さん。

思い出したかい？

うん、思い出した。

そうだった。この樹の下で、あたしはお母さんに抱きしめられたんだ。しっかりと抱きしめられた。緑の香りを吸い込む。

これから家に帰り、ちゃんと話そう。あたしはどう生きたいのか、お母さんに伝えよう。ちゃんと伝えられる自信がなくて、ぶつかるのが怖くて、お母さんのせいにして逃げていた。そんなこと、もうやめよう。お母さんに、あたしの夢を聞いてもらうんだ。あたしの意志であたしの未来を決めるんだ。

(あさのあつこ「みどり色の記憶」による)

(注) キャンバス——キャンバス。油絵用の画布。

問一 〓線1、2の読みを書きなさい。

問二 〓線1、2の文中における意味として最も適当なものを、それぞれア～エから選びなさい。

- |            |           |
|------------|-----------|
| 1 大仰なもの    | ア 大げさなもの  |
| イ 運任せなもの   |           |
| ウ 流行しているもの | 2 血相をかえて  |
| エ お金のかかるもの | ア さっそうと   |
|            | イ 激怒して    |
|            | ウ 機嫌をそこねて |
|            | エ あわてて    |

問三 〓線1「うつむいて、そつと唇を噛んだ」とありますが、このときの気持ちを次のようにまとめるとき、に当てはまる表現を文中から八字で書き抜きなさい。

高校卒業後にパンの専門学校に行きたいと話することができる真奈に比べ、をもって、進路について話すことができない自分に悔しさを感じた。

問四 〓線2「香りがした」とありますが、このとき千穂が感じた「香り」は何の香りですか、最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 焼きたてのパン
- イ アスファルトで固められていない土
- ウ 大きな樹
- エ 花屋

問五 〓線3「枝に腰かけると、眼下に街が見渡せた」とありますが、この後千穂は、小学生だったころに、大樹の上でどのような気持ちになったことを思い出しますか。解答欄に示した表現に続けて、六十字程度で書きなさい。

問六 〓線4「大きく、深く、ため息をつく」とありますが、このとき、なぜ千穂はため息をついたのですか、適当なものを、ア～オから全て選びなさい。

- ア お母さんは、芸術科のある高校に進学したいという私の気持ちを全くわかってくれないと思ったから。
- イ 芸術科のある高校に進学するなんてとんでもない話だと、お母さんに言われたことを思い出したから。
- ウ 医系コースのある高校に通いながら画家を目指す覚悟を、お母さんに認めてもらえる自信がなかったから。
- エ お母さんは、ロボットのように感情を表に出さず、私の趣味を一笑に付すに違いないと思ったから。
- オ お母さんは、父の跡を継ぐために医者になる未来を押しつけてくるに違いないと思ったから。

問七 〓線5「緑の香りが強くなる」とありますが、千穂が強くなったと感じた「緑の香り」は、千穂にどのようなことを思い出させ、どのような決意をもたらしましたか。八十字程度で書きなさい。



三

次の文章を読んで、問いに答えなさい。(配点 14)

〔これは漢の国の役人であった華歆と王朗が、戦乱から逃れようとしているときの話です。〕

華歆・王朗俱に船に乗りて難を避く。一人依附せんと欲するもの有り。歆すなはち之を難む。<sup>1</sup>  
朗曰はく、幸ひに尚ほ広し、何為れぞ可ならざらんと。後、賊追ひて至るに王携へし所の人<sup>2</sup>  
を捨てんと欲す。歆曰はく、本疑ひし所以は、正に此が為のみ。既已に其の自託を納る、寧ん<sup>3</sup>  
ぞ急を以て相棄つべけんやと。遂に携拯すること初めの如し。世此を以て華・王の優劣を定<sup>3</sup>  
む。

(「世説新語」による)

(注) 依附せんと欲する——連れて行ってほしいと頼む。

すなはち——ひたすらに。

難む——断る。

疑ひし——ためらった。

自託を納る——頼みを引き受ける。

携拯する——連れて行って助ける。

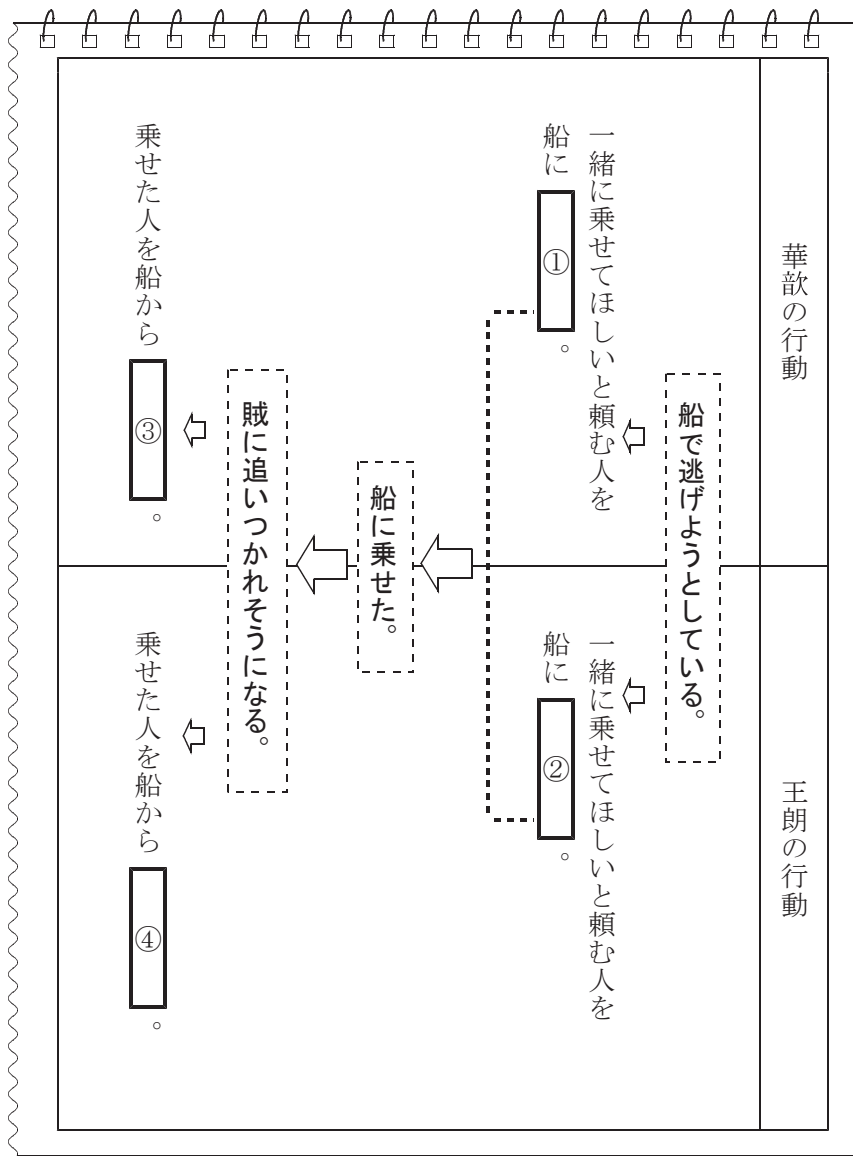
問一 ——線1「朗曰はく」とありますが、このときの王朗の言葉を全て抜き出し、最後の三字を書きなさい。

問二 ——線2「王携へし所の人を捨てんと欲す」とありますが、このように読むことができ  
る漢文として正しいものを、ア～エから選びなさい。

- ア 王 欲 捨 所 携 人
- イ 王 欲 捨 所 携 人
- ウ 王 欲 捨 所 携 人
- エ 王 欲 捨 所 携 人



問三 ある生徒が華歆と王朗の行動を次のようにまとめました。①～④に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、ア～エから選びなさい。



	ア	イ	ウ	エ
①	乗せようとした	乗せようとしなかった	乗せようとした	乗せようとしなかった
②	乗せようとしなかった	乗せようとした	乗せようとしなかった	乗せようとした
③	降ろそうとした	降ろそうとした	降ろそうとしなかった	降ろそうとしなかった
④	降ろそうとしなかった	降ろそうとしなかった	降ろそうとした	降ろそうとした

問四 —線3「世此を以て華・王の優劣を定む」とありますが、あなたは華歆と王朗のどちら

らが優れていると考えますか。次の条件1～4にしたがって書きなさい。

条件1 二つの文で書くこと。

条件2 一文目は、二人のうち、どちらが優れているかを書くこと。

条件3 二文目は、あなたが優れていると考える理由を書くこと。

条件4 一文目は「私は」で書き始め、二文目は「からです。」という文末で結ぶこと。

#### 四

次は、K中学校の図書委員会に対して、意見箱を通してある生徒から寄せられた要望（A）と、図書委員の話し合いの場面（B）です。これらを読んで問いに答えなさい。（配点 18）

（A）ある生徒から寄せられた要望

図書委員会へ要望があります。現在、図書室で本の貸し出しを行っているのは昼休みだけです。それを放課後も行つてはどうでしょうか。私は放送委員の仕事があり、なかなか昼休みに行くことができません。ぜひ、検討をお願いします。

（B）図書委員の話し合いの場面

（小野さん） これから図書委員会を始めます。今日の委員会では、意見箱担当の川口さんからお話があります。

（川口さん） 意見箱に図書委員会への要望が寄せられました。掲示板に張り出す要望への回答案を作成したので、みんな見てください。

【回答案】

対応できる委員がいないので、放課後の貸し出しを行うことはできません。昼休みに利用するようにお願いします。

（伊藤さん） せっかく要望を出してくれたのに、何も対応しないのは、申し訳ない気がするね。

（秋田さん） でも、今の図書委員はみんな放課後に部活動があるから、放課後も貸し出しをするのは難しいよね。

（中西さん） だけど、放課後の貸し出しを始めたら、今よりも多くの人が読書をしてくれるようになるんじゃないかな。

（小野さん） そうだね、図書委員会としては、一人でも多くの人が本を手取る機会をつくることで、読書をする人を増やしたいよね。なんとか放課後も貸し出しができる方法はないかな。

（伊藤さん） 例えば、図書委員が部活動の休みの日に交代で、放課後の貸し出しを行うのはどうだろう。

（秋田さん） でも、全員が部活動の曜日もあるよね。

（中西さん） それなら、放課後の貸し出しを手伝ってくれるボランティアを募集するのはどうかな。

（秋田さん） それはいいね。毎日二人ぐらい手伝ってくれる人が集まれば、放課後も貸し出しができるね。

（川口さん） いいですね。そのアイデアを取り入れて回答案を書き直します。



